

「広島たのしい同和教育入門講座」記録

講座〈部落の歴史〉

—たのしい同和教育をめざして—



住 本 健 次

広島仮説サークル

はしがき

住 本 健 次 (福岡県・北九州高校)

「同和」教育において、いま私がめざしていることが2つあります。

そのひとつは、現在、部落史の研究は日進月歩で進んでいますが、教育現場では、教科書に登場した1972年以来、現在まで、教え方はほとんど変わっていないのが現状です。つまり、研究と教育が大きく乖離しているともいえます。そこで、私は「部落史の研究の成果を生かした新しい「同和」教育をめざしたい」と考えています。

それ以上にめざしていることは、<たのしい同和教育>の創造です。月刊『たのしい授業』（仮説社、1995年9月号）に、「たのしい同和教育をめざして」という論文を載せていただきました。それに対して、いろいろな方からの反響がありました。それは教職員だけでなく、教育委員会の関係者や部落史の研究家からもありました。

私は<たのしい同和教育>ということに批判がくるのではないかと予想をしていましたが、批判的なものはほとんどなく、多くは賛意、激励の意見でした。今までとはちがったやり方の同和教育、そして<たのしい同和教育>が求められていることを、あらためて実感しました。

仮説実験授業は「真理は押しつける必要はないし、押しつけたとたんに真理でなくなる」ということが大前提です。「真理かどうか」は、「だれもが納得せざるを得ない実験結果によって決める」という方法によって、仮説実験授業は<たのしい授業>を実現することに成功してきました。

この仮説実験授業の方法を取り入れれば、必ず、同和教育も<たのしく>することが可能だと考えています。つまり、「正義を押しつけない同和教育」、「党派性にとらわれず、誰もが納得いく事実をもとにすすめていく同和教育」をめざして作成したのが、授業書案<部落の歴史>

です。これは、まだ完成したものではなく、まだ不十分なところが多々あります。いろいろな方の意見や批判を参考にして完成させていきたいと考え、いろいろなところで、〈部落の歴史〉を体験していただいているところです。

いままで、私が各地に招かれておこなってきた入門講座は、仮説実験授業をそれなりに知っている人が中心でした。しかし、今回の広島での「たのしい同和教育入門講座」の参加者には、仮説実験授業をまったく知らない人が多数いました。ダイレクトメールでこのような会があることを知り、参加したとのことでした。

今回の広島のは「仮説実験授業を知らないひとが、どのような反応を示すか？」という、いわばひとつの実験のような会でした。授業書を冊子のまま配りましたので、「次のページの解答をできるだけ見ないように」と言ったものの、先の答えを見てしまうのではないかと心配しました。事実、最初の2～3くらいの問題は、次の答えをチラッと見てから手を上げるひとがけっこういました。しかし、だんだん問題が進むにしたがって答えを見る人が少なくなり、第2部に入ったころは、ほとんどのひとが先の答えを見なくなりました。「先に答えを見てしまうと、自分自身がたのしくなくなる」ということが、仮説実験授業を知らないひとでもわかってきたようです。

同和教育の研修会でも感想文を求められることが多いのですが、ふつう、まったく書いてくれないか、お付き合い程度に無難な内容を少し書いてくれる程度です。ところが、今回の参加者の多くの方がその感想文をぎっしり書いてくれました。そして、その感想文から、参加者が楽しんでくれたことが、ひしひしと伝わってきました。大変ありがたいことだと感謝しています。

*

「たのしい同和教育入門講座」の開催と記録のまとめにあたって、広島サークルの多くの方にお世話になりました。心から感謝いたします。

今回の講座の記録は、仮説実験授業をほとんど知らないひとを対象にする場合の参考になるのではないかと期待しています。 (1996. 8. 2)